第三回　美術史各個人の感想

ライフスタジオ大宮店　矢口多絵

**（実践を通したスタッフの感想）**

竹内：　実践においては自分自身のが無意識に書いても絵とは鏡のように自分を映し出すものであった。絵を描くことは難しいことと考えていたが。何よりも抽象画を描くようにシンプルに考えるという事が大切であると思った。絵を描いたりするときは何を描くか？ということを考えがちであるが、深呼吸し描きたいものを描く自分を表現する手段として絵を描くことを楽しみたい。

北岑： 　名前も分からない絵をみんなで見て、絵にタイトルをつけた際、タイトルはそれぞれ違うものの、絵から伝わるイメージがなんとなくみんな似ていた。色や形などから受ける印象が共通していることがおもしろかった。これとは逆に、同じ指示で、同じように描いたはずなのに、全く違う絵になる面白さもあった。その絵から今の自分の状況や深層心理がわかる解説を読むと、当たっているかは分からないが、みんなの心の闇があらわになった。絵の奥深さを知った。

上田： 　絵を描くことは楽しい。技術云々ではなく、内面にある物を表に出し、それを感覚器官を通して再認識すると言う作業に面白さを感じる。自分を客観視するという作業はもう一人の自分を探っているようでミステリアスだ。時に絵は本当の私の気持ちを代弁するには足りないこともあるが、それでも気持ちや考えを表に出して自分で確認したり、誰かに見て意見してもらうのは面白い。絵を描く時間は一種の癒しのようなそんな時間だった。

初見：　 私は今までで、絵を書くことが少なかったです。興味もなければ決して上手くもありませんでした。なので絵を書くことは好きではありませんでした。ですが実戦を通して絵を書くことが、上手い下手を気にせずに書くことが出来て楽しくなれました。特にある１つの絵に対して題名を付けるという主題があって、それをリラックスして観れた時にすぐに題名が自分なりに思いつきました。その瞬間が絵の面白さを感じさせられました。

渡邊：　 一番印象に残ったのは座右の銘モットーにしている事についての実践で、形にするまた表現することで自分の考えを再認識することができたし人の考えを知る機会となった。絵にタイトルをつけた時は絵だけ見た時と違いその絵に対して親近感がわき自分の感じた部分と人との違いに面白さを感じた。バウムテストでは同じ木を描いたが大きさ、形、細かく描いている等やはり違いがありそれがその人らしさなのだと思った。その人が生み出すものには絵に限らずその人が持っている内面的な部分が表れてくるのだろうなと感じた。今回はライフスクールでの実践に参加できなかったので補習という形で３人で行ったが他のメンバーの絵や感じた事等知りたいと思えるきっかけとなった。

矢口：　実践においては「抽象絵画を楽しむため」に実際絵に題名をつけたり詩を書いたりして本にあるように抽象絵画を見る身体技法を実践しました。実際にやってみると例えば題名をつけた絵にはどことなく親近感がわき、また覚えるので次その絵を見たときには思い出し知ってるから楽しいと思えるのではないかと感じました。ある絵にタイトルをつけた時は同じ絵でもタイトルが皆全然違ったのですが、逆にある絵から感じる印象の時は皆何となく似たような「怖い」印象で共有されたりとあり、共感する面と個性でわかれる面と色々あり面白かったです。私自身は昔だったら抽象絵画にあまり惹かれなかったでしょうが最近美術を進める中クレーの絵等にも惹かれるようになりました。こうして感想やイメージを共有していく中、やはり本にもあるように個人の世界観、哲学というものが垣間見えてきて、更に自分自身の知らなかった面も見る事が出来たと思います。

鈴木：　 枠を次々に壊して広げていきたい私にとってはよき学習内容であり、気付かぬ自分との出会いと周りの仲間の内的なものを知ることが出来ました。なかなかお互いのことを知るために話すということはできない分、絵画はひとつ描くだけで皆のことをいっぺんに知ることが出来る魔法のようなものに感じました。多くの実践絵画のおかげもあってあ、あくびひとつも出ない学習内容であったと思います。準備を熱心にしていただいた矢口様に感謝いたします。今後もプチ実践絵画をたびたび行っていくのもいいなと思います。

齋藤：　イメージの共感によってエネルギーが伝達されるというポイントをもって、クレーが描いた同じ絵を見て、スタッフがそれぞれ感じるものを話した時、その絵と同じエネルギーを感じた過去の記憶が似ていたり、同じような感情を引き起こすという事実が不思議でした。この世のエネルギーを表現するとは、自分では計り知れない感じだけど、可能なのかもしれないとも思いました。最後に行ったバウムテストでは、木を描いただけで、その描いた人の内面が表れてるという事実をとても興味深かく感じました。絵だけではなく、写真や生活習慣、生き方もその人の内面が現れてくるものなのだと改めて感じました。

高津：　 今回はライフスクールでの実践に参加できず、よっちゃんとたえちゃんと3人での実践となったが、最も？苦手意識というか自分の中で理解が難しかった抽象絵画において、意外にもスラスラと描けてしまった自分に驚いた。今回の美術の課題は実践が多く、人前で絵を描くことは正直苦痛以外の何物でもなかったが、慣れとはすごいもので、実践を重ねるうちにそんな苦痛はなくなり、むしろ楽しんでいる自分がいた。今回の章でいっているように、「リラックス」して「楽しむ」余裕が自分の中に生まれたように思う。絵はうまいか下手かそのどちらかしかない、みたいな自分の中での苦手意識が、今回の実践を通して払拭されたように思う。個人的に、抽象絵画にタイトルやコメントをつけるという実践が面白かった。人によってタイトルもコメントも異なり、それもそれで、また新たな見方を教えられたようで興味深かった。

金子：　私は具体的にこれを描こうという題材よりも、抽象的なものを描いてみようというテーマの方が好きなのかなと思った。実際の題材があるとどうしてもそれに似ている、実際のものに近いかどうかと考えてしまうからだと思う。でも、本にもあったように、どれだけ上手に描かれているかは問題でなかったりもするし、美術を楽しむことは誰にでもできるのだと感じた。絵が苦手だと感じているのも、日本の教育を受けてきたからであるのかもしれない。

（全体を通した感想）

竹内：　 表現するということを私自身には難しく考えていました。表現とは考えつくされた事・卓越した技術などが必要だと思った。しかし表現とは作者の自由な意思が大切なのであり、何よりも個性というものが大切だと思った。私たちが掲げる自由で楽しい空間とはそのよ被写体が自由に表現する、場所としての意味合いがあると築く事ができたと思う。なによりも先ずは自分がどんな表現にも楽しみを持って刺激を受けていこうと思いました。

北岑：　 学校で学んできた美術とは違い、実践と分かりやすい説明で絵画に興味を持つようになった。人の描いた絵に興味を持つことはなかったが、画家の哲学や思想、時代背景などが色濃く表現されていると知り、これからいろんな絵画を見てみたくなった。自分の中に知らないうちに出来上がっていた固定概念をこの学習によってもみほぐされていった感覚がある。頭が柔軟になる感覚は心地よく、楽しく、新たな自分にであうきっかけになった。

上田：　 美術史と聞くと難しい印象があり、自分からは絶対に勉強しない分野だったので、こういった機会を通して勉強できたのは良かった。また美術史を学んでいるようで、実はもっと深く人間の根本的な部分について考えさせられることが多く、振り返ってみれば、私という人間について、または他の人について「知る」または「知りたい」と思わせてくれるきっかけになった。

初見：　 本当に絵という物は、色々な描き方があるのだなと知りました。この世界の人達の個性はもちろんのこと十人十色です。それと同時に絵に対する姿勢や描き方もひとりひとり違ってくるでしょう。自分の持つ考え方や絵の描き方が正しいと思いがちですが人それぞれ違うので、どうしてそう思うのだろう となってしまいますが改めて、絵を描いてみんなで披露をすることによって人の色々な考え方感じ方描き方を知って、人のそれぞれなんだな と納得させられます。

渡邊： 第２回の４章５章から参加し、これまで美術や絵画に対して興味はあったものの全然知識はなく今回の美術史主題学習はすごく新鮮だった。ただ綺麗や上手いだけでなく画家の考えや、描き方、独特な表現方法等知るきっかけになった。また実践絵画では絵自体描くのは苦手だったが、自分自身が考えていること思っていることを形にできそれまで深くは考えていなかった自分の事について知ることができたし、相手を絵で表現する実践では相手が持つ自分の印象というのも分かり自己分析や相手の考えを知ることができたと思う。

矢口：　 今回美術の時間では以前の内容学習だけではなく実践を多く取り入れ個人がなぜそう描いたのか意見を皆に話す時間、そして考えやってみる時間というものが多かった訳ですが、準備する側としては「もっと学習面を大きくした方がいいのではないか？討論にならなくてもいいのだろうか？」と大分考えました。ですが遣って行くうちにそれぞれ個人の個性とその先にあるそれぞれが持っている哲学や人間性や性格の一部、そして感じる世界や普段の目にする視点の違い等を見つけることができたように思えます。このような実践もいいのではないかと感じています。

鈴木：　今回の抽象絵画を題材とした実践は、いままでで一番自分の中のことを知り、伝えることができたのではないかと思いました。自己PRの文章を書くというのが本当のほんとに苦手です。学校や会社に提出しなければならない時は、ノイローゼになるのではないかと思うくらい嫌で嫌でたまりませんでした。そもそも自分のことなんぞ自分でも分からないし、ましてやそれを言葉にしてPRまでしなければならないだなんて血反吐が。。。やっとの思いで文章にまとめたとしても全然自分のこと出ないような気がして、今まで一度も自分を文章化できたことがなかった。しかし今回実践絵画を経て、自分をこんなにも表現することができるものなのかと驚きました。自分では気づいているようで気付いてなかった自分に出会う感動を実践絵画で受け取りました。

齋藤：　美術に対する興味はあるけど、なんだか良くわからない。そんな思いを抱えていましたが、この主題をとおして、新しい見方というものをたくさん得たように思います。また、新しい刺激を受け入れるということは感性のアンチエイジングになるということなので！感性を若返らせるためにこれから美術に触れる機会をもっと増やしていきたいです。

高津：　絵を描く実践が多かった今回の美術史の学習。絵は周知のとおり苦手だ。幼い頃は自由気ままに絵というものを描いていたのだろうが、いつ頃からだろう。他人と自分の絵とを比較しだし、「自分は絵が下手なんだ」という意識が芽生え始めた頃から、絵というものを自ら描くことをしなくなった。絵を描くことが嫌いだったわけではない。他人との比較により苦手意識が生まれてしまったがゆえの結果・・・。今思うとなんかもったいない気がしている。もちろん得手不得手は人それぞれであり、私は明らかに絵を描くことは不得手だったとは思うのだが、不得手なりにもっと描く機会があったなら、今のような画力（笑）にはなっていなかったかもしれない。

前置きが長くなってしまったが、絵を描くという行為は高校生の頃まで（授業で仕方なく）で、大人になってからはめっきり描くということをしなくなって早○年。まさかこのような形で人前で自らの画力を披露しなくてはいけない事態になろうとは思ってもみなかった。もうここは腹をくくるしかない。マインドフルな気持ちで臨もうと思った。私にとっては苦手なものを人前で披露するという何とも過酷な事態ではあったが、もう恥ずかしいとか言っている年齢でもない（笑）。結果、実践学習はとても楽しかった。自分自身もそうだが、人の絵や解釈を知れることもまた実践学習ならではの良さだと思った。前章の感想でも述べたが、美術史は一つの哲学だということも今回の学習を通して学ぶことができた。画家たちは自分の命をかけて、自分を、そして自分を超えたものを、絵を通して表現しようとする。その世界に触れるということは、その生き方に触れることであり、その哲学に触れるということである。美術とは程遠い世界にいる人間だと思っていたが、自分の身近なものとして美術をもっと楽しみたいと思った。まずは楽しむことから。その視点が得られたことが今回の美術学習での大きな収穫だったと思っている。

金子：　美術は知識がなく自分の中であまり楽しむという感覚が無かったが、今回の美術主題の本では、美術を楽しむ事をメインに身近な感覚に落とし込んだ表現がされていて良かった。また、実践では絵が苦手な私もとても楽しめる時間だった。イメージや内面から出てくるものを形にするのはとても難しく、全然思い通りにならなかったが、仲間のことを知ったり、表現の多様性を知ったりする機会になった。また、特に面白かったのは、スタッフが他のスタッフを表現する実践だった。それぞれの内面を知ることも楽しいが、他のスタッフがどうスタッフの事を見ているのかという事が知れるのは私にとって大変興味深く、今回の一番の収穫だとも思っている。そして自分が周りにどう見られているのかということは沢山コミュニケーションをとっている中でもあまり口にしない事なので、新たな発見もでき嬉しかった。

（今後撮影に生かせる内容）

竹内：　何よりも被写体の意思を否定しないという事を考えたいと思った。それは撮影を楽しむことに繋がるのではないか？私自身が楽しむ事が出来なければいけない。それは美術を楽しむことと一緒で、相手を知るということに繋がる。それが楽しい遊びの空間という私たちのアイデンティティに繋がるのだと思った。今まで以上に人を幸せにするという事はどのような事なのか？そのヴィジョンに近づけた気がする。

北岑：　 「感覚的にどうか？」自分に問いかける。この作業は、表現者としてとても大切なプロセスだと感じた。この絵が好きか嫌いか。なぜ好きなのか。写真を撮る際も、そう考え進めることで明確に伝えたいものがはっきりした写真が撮れるようになると思う。主題がはっきりした写真は見る人の心にストレートに届き、感動をうむ。美術を学習して、今後の撮影スタイルを見直す良い機会になった。

上田：　 私はどうやら被写体を見る時、自分のフィルターの色に大きく影響を受けるようだ。抽象画が理解不能なように、人に対してもシャットアウトしていることがあると思った。だからまずはかわいいと思えるポイントを探してみたり、これはもしやかわいいのではないか？と思ってみることにする。それは思い込みというよりも、他の人が見てもかわいいのではないかということであり、より一般的で普遍的なものでなければならないと思う。美術を通して一番私にとって効果的だったのは、抽象画に関する部分だった。抽象画を楽しめるようになったら私の写真も変わるかもしれないし、世界観すらも変わってしまうのかもしれない。

初見：　 この美術学習を通してたくさんの絵画の絵を観させていただきましたが、いくつか特に理由もなく、この絵良いな と思う物がありました。中には理由付けて良いと思う物もありました。この感性は、普段の撮影の写真に置いても言えることなのではないかなと思いました。撮影の写真を観てても 何かこのポーズ良いとか 理由が特に無いのに良いと思うことがたくさんあります。私もカメラを持たせて頂くことになったら何か良い というような自然な情景を撮れたら良いな と思います。

渡邊：　 今回の美術の学習で感じたのは「エネルギー」だった。画家たちは絵を描きたい、描かずにはいられないとゆう衝動がありそれが生命自体を感じられる行為でエネルギーとつながっていることを知った。 絵画でも描かされている人と自ら衝動に突き動かされて描いてる人の絵のパワー、その絵から感じるエネルギーが違うようにやらされているものには限界があると感じた。それは私達の仕事にも通じていて、自分から写真やお客様に対して最高のもの、時間にしたいと思わなければそのエネルギーは形として残らないし、お客様にも伝わらないと思った。また構図についての章もあり人がいいと思う安心する配置なども勉強できコーディネーターとして子ども、小物の位置等カメラマンが考えている構図を少しでも理解し撮影に活かしていこうと思う

矢口：　 今回美術で行った実践では実際に経験し自分たちの価値観や世界観を広げ、写真撮影という芸術に携わる職業である中、常に新しいものを取り入れ美的センスと感覚を広げていくことで今後撮影の中、仕事の中においても慣れたインテリアや形に捕われず挑戦し発見していく手助けになれたらと思い取り組みました。実際に美術を知り深く入る手前で足をかけるくらいになっていたかもしれませんが、この一歩というのは新しい世界観に入る小さくも大きな一歩となるのではないかと思います。仕事の中で今後新しい何かに取り組む時、発見する手助けとなるように一人一人の画家から学んだ世界観や挑戦した世界が生かせていけたら良い

鈴木：　もうこれから活かしまくりでしょう！！今まで学んだ「うまい」「ワールド」「スタイル」「アイデア」「一本勝負」「抽象絵画」からたくさんの要素を撮影に現時点で活かされていることをヒシヒシと感じております。さまざまな美術作品から発せられる生命感や空気感を敏感に感じながら、写真という光をつかった絵画に落とし込んでいくということは、私のとっては使命です。けしてモネやモンドリアンやダリの絵画のように写真は撮れないが、そのなかの骨組やエネルギーを写真には存分に活かせます。とにかく仕事上で起こりうるすべてのことに「おもしろいね！」っていえるレベルがグレードアップしたと思います。「いいねーゴッホみたいな服だねー」「そこダリのようにいこう！」「葛飾北斎みたいな顔やん！！」そんな美術的撮影にしていこう！

齋藤：　よりよい写真を作っていくために必要な観点をたくさん学びました。私たちも画家達のように、そこに存在する生命を写そうと必死にもがいているのだということを思いました。被写体に存在するエネルギーの流れみたいなものを感じ、捉えられるようになりたいと思いました。例えばポージングで、被写体を動かすエネルギーを見れるようになれば、自分がどこまで彼らに指示すべきか、どこまで彼らに任せるべきかを悟れるのではと思っています。相手を動かす力というものを学んでいきたいと思います。そして、表現することを恐れないこと。子供の頃、いつまでも落書きをしていられた私は、今自分のやるべきことをするのに毎日必死です。そんなときにノンストレスで自分のありのままを表現し、そして外から来る刺激を受け入れるという行為は今の自分に必要なことのように感じています。自分の人生を改めて考えるきっかけになるのではと思います。

高津：　私はカメラマンではないが、写真を撮るという行為にコーディという立場で携わらせて頂いている。美術は写真にも活かせる内容である。今回の美術史の学習に限らず、今までのヒーリング学習でも美術を学んできた。美術館に行って、実際に美術に触れる機会もあった。この仕事についていなければ、美術についてこんなに深く知る機会はなかったと思う。そして、写真に携わる者として、もっと自分の感性とか美術から学ぶことを普段の仕事にも活かせられたらと思う。「あ、いいな」とか、この「瞬間綺麗だな」とか、「あ、なんか好きだな」とか、そんな感性。それは写真においても美術においても磨かれるべき感性だ。そして感性だけではないこともこの美術学習を通して学ぶことができた。美術史の流れにおいてみえてくる、画家たちの美を求める姿勢や哲学。「なぜいいのか」、それを問いていく作業と、そして最終的には意味さえ求めない、ただ「楽しむ」ということの必要性。この美術史の流れを通してみえてきたことは、普段の撮影や写真においても共通している部分が多くあると思う。写真分析を通して、なぜいいのかという意味を問う作業も必要だし、そして時には意味さえ求めず、自分自身がリラックスしてそこにある瞬間だったり、楽しさだったりを家族と共有することで生まれる美しさもある。そのどちらもが必要であり、それは美術においても写真においても共通するものなのではないかなと思った。この学習を通して得られた内容を、日々の撮影や自分の人生に役立てていけたらと思う。

金子：　美術の技術(構図や色彩など)はもちろん、何を表現するのかという内面においても写真に通ずる部分が多くあったので、様々な要素を考えながら撮影にも活かしていきたい。また、実践部分で一緒に働くスタッフを更に知る事が出来、自分がどう見られているかも少し知れたので、よりチームワークと仲間の理解が深まったように思うので、それも仕事に活きていくと思う。